日本の歌ごころ

安田章生

日本の歌ごころ

安田章生

講談社

著者略歴
安田章生（やすだ　あやお）
1917年兵庫県に生まれる。
東京帝国大学文学部国文学科卒業，文学博士。
甲南大学文学部教授。歌誌『白珠』を父の青風とともに主宰。
主な歌集に『旅人の耳』（彌生書房），研究・評論書に『日本の芸術論』（東京創元社），『歌の深さ』『鑑賞日本の詩歌』（創元社），『王朝の歌人たち』（日本放送出版協会），『西行』（彌生書房）『西行と定家』（講談社・現代新書）などがある。

日本の歌ごころ　　定価1200円

昭和53年12月10日　第1刷発行

著　者　安田章生
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽 2-12-21
郵便番号 112
電話 東京(03)945-1111（大代表）
振替 東京 8-3930
印刷所　慶昌堂印刷株式会社
製本所　株式会社黒岩大光堂

© Ayao Yasuda 1978
Printed in Japan
0095-150862-2253(0)
（落丁本・乱丁本はおとりかえします）
（学1）

目

次

Ⅰ 歌ごころの本質――――7
日本の歌ごころ 9
歌の流れ 36
飛花落葉の世界を深める 52
――中世芸術論のなかの花道論――
中世和歌への関心 71
Ⅱ 知的抒情への志向――――99
私の短歌入門 101
短歌における知的抒情 130
知的抒情論の成立 141
短歌の品格 156

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

Ⅲ 現代短歌の位置——175
現代短歌の位置 177
古典の喪失と発見 187
危機の抒情 207
歌の中道 214
短歌・青春・老年 218
宇宙感覚 221
止観明静の世界 224
Ⅳ 作歌の姿勢——231
私の短歌作法 233
集中力 240

推敲 243
ことばを磨く 248
詩人のことば 258
淀川の水の様に 261
見ざめしない歌 265
強い歌・弱い歌 269
つねに物をおろそかにすべからず 272
自選歌 275
作家と読者 278
自己の風体 281
あとがき―― 284

日本の歌ごころ

装幀＝長尾　信

I

歌ごころの本質

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

日本の歌ごころ

「日本の歌ごころ」についておもいめぐらすとき、私の念頭にまざまざと浮かんでくる一つの体験がある。

ある夏、香港へ出かけた時のこと、ただ一泊の短い滞在であったが、有名な夜景をビクトリア・ピークから展望した。

空気が澄んでいるからであろう。町の灯は、透明な輝きを見せ、細い入江の水をはさんで、眼下に近く遠くともり、その灯の光は、秋の感覚のようなものを、私に感じさせた。

そのとき、足もとの山の斜面の草むらのなかで、かすかに細く鳴いている虫の声に、私は気がついた。たしかにコオロギである。私は、念のために、現地の案内人に、その虫の名をたずねてみた。すると、その人は、虫の名を知らないばかりか、そういうことにはまったく関心がなかった。私の質問に、一瞬、耳を澄ました様子であったが、あの虫は一年中鳴いている、というだけであった。私は、さらにもう一人の現地の案内人にもたずねてみたが、その答えもほぼ同様であった。また、案内の人は、バスの運転手にもたずねてくれたが、結果は同じであった。

三人の現地の人が、虫の声にまったく無関心で、その名も知らないことが、私には興味ふかかった。おそらく、その虫が一年中鳴いており、それほど注意をひくような声でもないところから、そういうことになったものであろう。

アメリカ人も、虫の声に対して、一般に、関心がない由である。池田摩耶子氏は、その長いアメリカでの日本語教授の体験にもとづいて、そのことを興趣ふかく述べられている。氏があげられている一例に、こういうエピソードがある——。川端康成の『山の音』のなかの「八月の十日前だが、虫が鳴いている」という一節は、アメリカの学生には、まったく理解しがたいものであったという（『日本語再発見』）。

日本ではコオロギは、周知のとおり秋のはじめごろから鳴き出し、秋が逝くころに鳴きやむ。その種類も多く、鳴き声も微妙に違うが、ともかくその声に、われわれは季節の推移を感じ、い

のちの「あはれ」とでもいうようなものを感じとる。その声を詠んだ歌は、『万葉集』の昔から、少なくない。

夕月夜こころもしのに白露の置くこの庭にこほろぎ鳴くも　湯原王

秋風の寒く吹くなへわが宿の浅茅がもとにこほろぎ鳴くも　作者不明

影草の生ひたる宿の夕陰に鳴くこほろぎは聞けど飽かぬかも

庭草に村雨ふりてこほろぎの鳴くこゑ聞けば秋づきにけり

こほろぎの待ちよろこぶる秋の夜を寝るしるしなし枕とわれは

草深みこほろぎさはに鳴く宿の萩見に君はいつか来ますむ

『万葉集』には、これら合計六首のコオロギに関する歌がみられる。この時代のコオロギは、秋に鳴く虫の総称であったろうと考えられているが、ともかく、秋とともに鳴く虫の声に耳を澄まし、ある場合には、ただその声を聞きとめたというだけのことで、一首の歌が詠まれている。それほど、そのことに日本人は、心を動かしているわけである。

『古今集』にも、コオロギの歌は、同じく合計六首みえる。そのなかから少しあげてみよう。

きりぎりすいたくな鳴きそ秋の夜の長きおもひはわれぞまされる　藤原忠房

秋萩も色づきぬればきりぎりすわがねぬごとや夜はかなしき　よみ人しらず

われのみやあはれとおもはむきりぎりす鳴く夕かげのやまとなでしこ　素性法師

この「きりぎりす」というのは、コオロギのことだと考えられている。ともかく、そういう虫の声に耳を澄まし、秋の「あはれ」をしみじみと詠嘆しているのが、これらの歌である。

『古今集』には、なお、たんに「虫」というように出てきて、秋の虫のことを詠んでいる歌が七首みえる。そのなかから、次に二首あげる。

わがためにくる秋にしもあらなくに虫のね聞けばまづぞかなしき　よみ人しらず

秋の夜の明くるも知らず鳴く虫はわがごとものやかなしかるらむ　藤原敏行

「松虫」が詠まれている歌は四首あり、ここには一首だけを例としてあげておく。

もみぢばの散りてつもれるわが宿にたれをまつ虫ここら鳴くらむ　よみ人しらず

以上あげた歌はいずれも、虫の声に耳を傾けている歌である。

私なども幼い日から、秋の虫の声に耳を傾け、そこに秋の静けさを感じてきた。そして、その虫の声とともに、なべての生あるもののかなしい命の声のようなものが聞こえてくるような思いを、子ども心に味わったものであった。

長塚節の有名な歌に、

白銀の鍼打つごときぎりぎりす幾夜はへなば涼しかるらむ

という歌がある。この「きりぎりす」もコオロギのことだと思われるが、コオロギの細く澄んだ声を「白銀の鍼打つごとき」というようにとらえた感覚は、まことに見事で美しく、一首は流麗な調べをもって、秋の涼しさを待ち望む思いをよく伝えている。

コオロギの歌ではないけれども、節の有名な歌で、私の好きな秋の虫の歌を、もう一首あげてみよう。

馬追虫の髭のそよろに来る秋はまなこを閉ぢて想ひ見るべし

じつに繊細な感覚の歌である。こういう繊細な感覚によってはじめてとらえることができるような、微妙に繊細な味わいが、日本の季節の移り変わりにはあるのであり、そのことを、この歌は美しく示している。

私は年少のころ、兵庫県の山崎町という山峡の町に住んでいた。夏は青蚊帳を吊って寝たが、庭先から馬追虫がとんできてその蚊帳にとまり、やや性急な、しかし澄んだ声で、ひとしきり鳴くということがよくあった。そして、その声のするほうを見ると、馬追虫は美しい緑色の肢体についている細い長い触角を時々ふっていたりした。そういう声を聞き、その姿を見るとき、ああもう秋が来たのだなあという感じを、幼い私もしみじみと味わったものである。

大体、このような、たいへん微妙で美しい自然に囲まれ、繊細な季節の推移にともなう深い「もののあはれ」を感じて、それを詠むというところが、日本の歌には、古来、多く見られる。日本人が、このように、虫の声に対して鋭敏な感受性を有しているということは、たしかに、四季の推移が微妙に美しい、その自然環境と切り離しがたいことであろう。

さらにまた、角田忠信氏によると、日本人では、虫の声は、言語音、人声、動物、小鳥の声などとともに、言語半球（優位半球）の脳で処理されることが優位になっているという。そして、このことは、インド・ヨーロッパ語を母国語とするひとびとでは、子音は言語半球が優位であるけれども、母音、合成母音、人声、昆虫、動物の鳴き声などは劣位半球が優位となって処理されていることと対照的であるという。

この興味ふかい事実を指摘して、氏はいわれる。「日本人が秋の虫の音に季節感や安らぎ、またもののあわれを感じるということは日本人に特徴的な音の処理機構の特異性に根ざすものではな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com